

山形市中心街にある、ものづくりの現場。オリジナルデザイン家具の〈TIMBER COURT〉。

山形市の中心部十日町にある〈ティンバー コート〉は、デザインから製材、組み立てまでを手作業で行うオリジナル家具の店です。大学でプロダクトデザインを学んだ相田広源さんは、卒業後県内の木工所で職人としての技術を

磨き、2011年7月に〈ティンバー コート〉をオープン。丹念な仕事が光るダイニングテーブルやキャビネット、イスが並ぶ店舗には、県内の作家8人の作品も展示されています。「メイン通りに面した立地を活かし人の流れを作りた

い」と語る相田さん。現在は、作家たちが作ったカップやスプーンなどでサービスをするカフェを併設し、気軽にものづくりに触れられる場所へと改装を進めています。
WEB〈ティンバー コート〉について詳しく紹介しています。



TUAD IS HERE

●日常の中の芸工大

表紙のアート



世代を越えて地域で顔が見える関係づくり
 『毎日こうみんかん』

2011年度卒業の期間中、常に30人ほどの人で賑わっていたのが、子ども芸術教育研究領域の石沢恵理さんによる『毎日こうみんかん』です。毛糸を巻く、楊枝で刺す、雑巾で拭く、といった日常生活の中で行われる、簡単な手の動きでできるアート作品のワークショップを日替わりで開催。期間中、何度も足を運ぶ常連ができたほど人気を博しました。

WEB 『毎日こうみんかん』の詳しい内容はwebで

g*gとは

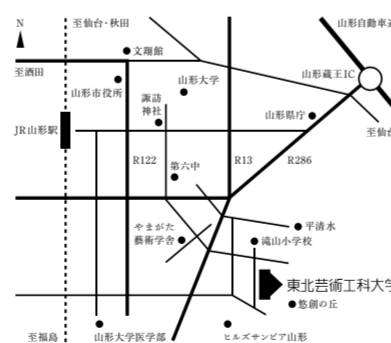
芸工大広報誌のタイトルは「g*g」。最初の「g」は芸工大のgであり、もうひとつの「g」は芸術市民のg。文化的志向を持つ皆さんを「芸術市民」と名付けました。あの絵が好き！このデザインがかっこいい！景観がきれい！こんな風に日常の中で感動できる人は立派な芸術市民。そんな芸術市民のみならずと芸工大が、「+」より強い「*」で結ばれることで、新しい何かを創り上げていきたい、そんな思いを込めて「g*g」、親しみを込めて「ジー・ジー」と呼んでください。広報室では、「g*g」を置いていただけるショップやギャラリーなどを随時募集中です。

東北芸術工科大学

【芸術学部】文芸学科、美術史・文化財保存修復学科、歴史遺産学科、美術科 [総合美術/日本画/洋画/版画/彫刻/工芸(漆芸、陶芸、金工)/テキスタイル]
 【デザイン工学部】企画構想学科、プロダクトデザイン学科、建築・環境デザイン学科、グラフィックデザイン学科、映像学科、メディア・コンテンツデザイン学科
 【大学院芸術工学研究科】博士後期課程 芸術工学専攻、修士課程 [芸術文化専攻/デザイン工学専攻/デザイン工学専攻(仙台スクール)]
 【研究機関】やまがた芸術学舎/共創デザイン室/東北復興支援機構TRSO、東北文化研究センター、文化財保存修復研究センター、子ども芸術教育研究センター、デザイン哲学研究所、東アジア芸術文化研究所

g*g オフィシャルサイト <http://gs.tuad.ac.jp/gg/>

大学周辺マップ



東北芸術工科大学 広報誌 g*g
 2012年4月12日発行
 発行:学校法人東北芸術工科大学
 〒990-9530 山形県山形市上根田3-4-5
 東北芸術工科大学広報室
 TEL:023-627-2246 FAX:023-627-2185
 URL: <http://www.tuad.ac.jp/>
 Email: hello-gg@aga.tuad.ac.jp
 ©東北芸術工科大学 Printed in Japan 2012
 印刷:田宮印刷株式会社



当日、制作の材料を買いに行った立谷川で、外に出ると電柱が折れて倒れていたのを覚えています。祖父母が心配になり安否確認し、自分に何ができるかを考えている時に福興会議のツイートを見て参加を決めました。3.11アフターレポートを始めるにあたり、微妙な立場である山形の人間が被災地に入ることに異れと不安がありました。被災者の想いを聞き書きし心に留めたこの1年間を振り返ると、東北という大きな括りで自分の町のような感覚になりました。外側から見る人間から、関わった当事者に少しずつ変わっていったのかなと思っています。(本学学生)

山形市内で地震を感じた時は、机の下で半べそかきながら揺れに耐えました。会社の指示で落合スポーツセンターの支援物資搬送の手伝いをし、そこでスマイルエンジンを知ってからは現在までずっと参加しています。そこで見たのは、全国各地で震災を経験された人が足を運んで、何かの形で支援している姿。本当の意味で“絆”があると感じられました。(会社員)

私には、自分がボランティアに行っているだけなのではないかという気持ちがありました。しかし、そこで感じたことを伝えることができると気づき、自分を受け入れられるようになりました。私は最近、日常を大切に生きる気持ちと同様に、ワークショップやスマイルエンジンなど、自分が動くことで“大切な1日”をつくることも大事だと考えています。(本学学生)

地震発生からすぐに災害派遣の準備に取りかかり、翌朝から宮城の北上町で、救助、捜索を開始しました。窓のないトラックから降りた時、初めて見る被災地の姿、人々の姿に愕然としました。それから2ヶ月間は休みなく活動し、9月には通常の訓練に戻りました。“震災は終わっていないのに訓練に戻る”ということに違和感を覚え、休日をスマイルエンジンの活動に当てることができました。多くの人が震災から心が離れている中、スマイルエンジンで仲間が増え、訓練が人のためになることを実感し、自分自身がとても成長できたと思います。(自衛隊員)

3.11と芸工大

被災者であるなしに関わらず、世界中の人々の価値観を揺さぶった3.11。震災から1年後の今、一人ひとりが震災の体験者として今を語り、分かち合う「3.11追悼の輪」を開催。東日本大震災発生時刻14:46を挟んで夕刻までひとりずつ震災にまつわる体験や想いを順番に語り継ぎました。震災で亡くなられた方々への追悼とともに、東北芸術工科大学のこれからの決意を、根岸学長が語りました。

※個人の思いを尊重して、発言内容にできるだけ即して掲載しています。

震災当日は実家に帰省していて、パソコンに向かっていました。慌てましたがひどい揺れはなく、はっきりと何が起こったかを体感する出来事は自分の周りには起こりませんでした。学校が始まってからも募金以外、積極的な活動はできませんでした。実際に今の時点で何もできていないです。「中途半端な気持ちでボランティアに来られても足手まといになる」という情報があると、行動しようという気持ちも引込んでいきました。語れることがほとんどない人間が、こういう場に来て何ができるのか。家でひとりで黙って待たなければいいとも思いましたが、震災を身近に意識しないと何もできないと思い参加しました。皆さんの話を聞くことで自分の次につながるのではないかなと思っています。(本学学生)

やまがた芸術学舎の近くに住んでいます。今朝散歩をしていたら看板が出ていたので追悼の輪に参加しました。今年1年、私は日本人の、助け合い、譲り合い、我慢、感謝、祈りの心に触れました。去年の春から毎週末、朝6時過ぎには、ここからバスに乗ってボランティアに行っているのをずっと見てきました。皆さん素晴らしい方だと思っています。(会社員)

被災地の加工食品メーカーが機能しない中、被害が少ない山形からの供給はとても重要でした。震災翌日から食品を切らさないよう集中して仕事していた記憶があります。多くの人が命を落としていて自分は生かされているという状況で、今まで人生を無駄に過ごしてきたことを反省し、丁寧に人生を生きなければならぬと思いました。何かをしたいという気持ちからスマイルエンジンに参加しましたが、この1年間で自分の心の中にも震災に対する意識の風化が感じられます。これからの未来のため、復興のためにも風化させたくないと思っています。(会社員)

震災から1年、一番考えていたのは生と死です。不安ばかりで震災をどう受け止めて良いかわからないまま、今日を迎えてしまいました。今朝、祖母が亡くなったという連絡がありました。被災者の方は、どんな気持ちで今日を迎えているのでしょうか。祖母の命を迎える度に、祖母に被災者のことを忘れるなと言われているような気がしています。(本学学生)

1階で本を読んでいた時に地震が起こりました。以前、静岡県沼津市にいたこともあってあの程度の揺れには驚きませんでしたが、その後の被害には唖然としました。スマイルエンジンを知り、75才でも参加できるということで現地に行くこと、そこにあるのは第二次世界大戦戦後、疎開先から戻ってきた東京で見た焼け野原と酷似している風景でした。建物も残っているがぬくもりが感じられない風景。私は現在76歳で、定年退職して時間はたっぷりあります。孫のような、明るく誠意のある学生の仲間と一緒に、極力スマイルエンジンに参加していきます。(無職)

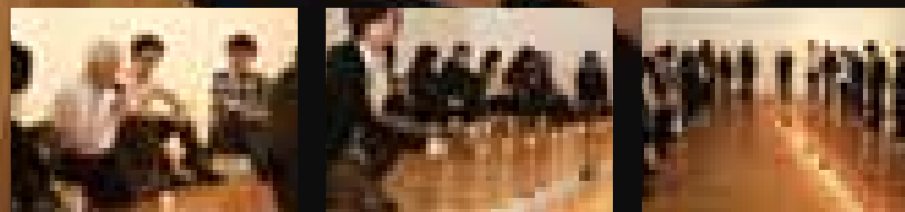
受験が終わり、家で1人でくうたらしていた時に地震がありました。父が石巻港で仕事をしていたこともあって、自分にできることを何かしたいと思い、山形に来てからスマイルエンジンに参加。渡波の仮設住宅に何度か足を運びました。最初はボランティアと被災者という関係でしたが、最近は立場に関係なく、人と人のつながりに変わってきていると感じています。(本学学生)

大学近くの画材屋で地震を感じました。後輩や友人が困惑していたので、みんなで集まり大学のガストロブを開いて日を過ごしました。すぐに思ったのは“自分は大丈夫だ”ということ。身体が動くので何かをしようと思い、ツイッター上で知った福興会議にアクセスしボランティアに参加。あまりの現実思考がついていかないう場面もありました。震災以前の価値観を揺さぶられ、受け止め切れないものにどう向き合っていくか、今もそれ自分に問い続けています。理解して消化することより一端引き受けてみるという姿勢で関わっていくことが大事な気がしています。(山形大学生)



宮城県庁舎10階で感じた震度6強の揺れ。最初にニュースで見た、赤く染まった東日本、“南三陸町壊滅”という文字が未だにフラッシュバックします。庁舎に避難してきた600人程の方が、食料の配給より電源の列に並ぶのを見て、家族の安否や情報が求められていることに気づき、できる限りの情報を流しました。組織でできないことは個人のつながりで、想いをつなげていきたいです。(山形県職員)

僕自身、3.11以降被災地といういろいろな形で関わり行動してきました。僕は自分の中で常に“家族”をテーマにしていて、子どもが持っている未来の時間に対して、自分ができることをやってきたように思います。震災を機にこれまでの経験がリセットされ、自分以外の若い人を守る父親、母親として行動する感覚です。1年間、学生たちとも濃いつながりのある時間を過ごし、教員というより叔父のような気持ちで、彼らと一緒に東北での時間を過ごしたいと考えようになりました。福島からの避難者で出会った人たちに對しても擬似的な家族のように捉えていて、土地からは離れてしまったけど、今日のようにひとつのテーブルを囲むイメージで家族のような時間を過ごしていきたいし、それを拡大して大きな広がりとして東北を捉えていきたいと考えています。僕らの活動がそういうものである限り、家族のためにやれることをやっていきたいと思っています。(本学芸員)



写真左：「語りの中で一人ひとりの存在を確かめ受け止めて、静かに深く追悼の気持ちを表したい」と語る根岸学長。写真右：震災発生時刻まで、ロウソクを灯していく学生。写真右：3月11日14時46分、黙祷。

蔵王のホテルでインフォメーションの仕事をしていました。地震が起きた時間、私の周りには父親、母親、3人の子どもがいました。ひとりずつ子どもを抱えていたのは一番大きい男の子と一緒にいましたが、なかなか取まらない地震にその子がパニック状態になりました。私はその子の心を癒してあげられなかったことが、1年経った今でもとても悔やまれます。(会社員)

今までに感じたことのない揺れを感じ、勤務していた書店からお客さんを避難させました。ニュースを見てとんでもないことになっていると思った後に停電。今は普通に生活ができていて、停電の不便、スーパーの物不足、ガソリンスタンドの渋滞などの記憶も薄くなっています。1年という区切りで忘れてはいけないし、これからできることを考え行動していきたいと思っています。(会社員)

岩手県に28年住んでいたで、津波が来る前の町の姿を知っていました。どこに津波がきて何が失われたかがリアルに感じられるとても悲しかったです。1ヶ月間々とした後バイクで石巻まで向かい、ボランティアを考え、スマイルエンジンに参加。現在、少しずつ復興は進んでいますがまだまだ。それを山形の人に話しても反応が薄いように感じています。(会社員)

帰省中の栃木で、電車乗車中に地震が起こりました。周囲から聞こえてくる「震源は宮城」という声に、山形の被害が心配になりました。山形に戻ってからは、荒井良二さんの活動などに携わり、感じるに触れること、自分の身体を動かすことが大事だと知りました。この震災の時に大学生であり東北にいたことが自分の人生でとても大きいと思っています。時間を自由に使える学生だからこそ、被災地に関わり続けていくことができます。ひとりの意識で全てが変わることを自覚し、アートやデザインなど自分がやっていることとの関わりも見えてきた気がします。(本学学生)

3.11以降、動き続けた芸工大。未来へ継続する実践の記録。

芸工大は東日本大震災の発生以降、東北にあり被害を免れた大学として、復興のための活動を展開してきました。そしてこれからも、共に活動を続けて参ります。

3.11 福興会議
震災翌日に、Twitterから誕生した復興支援チーム。3月14日には「山形だから可能な／学生だから可能な支援活動とは？」を協議。HPを立ち上げ、多くの支援プロジェクトのプラットフォームとして機能し続けている。

3.12 東日本大震災に伴う授業料等の減免
2011年3月22日の理事会において、激甚災害指定を受けた地域に住所があり、ご家族が被害に遭われた場合、平成23年度の授業料等の減免措置を可決。

3.22 避難所に紙管間仕切り設置
山形県の体育館などに一時避難されている方へ、少しでも落ち着いた日々が送れるように、紙管と布を用いた間仕切りをボランティア建築機構が提案。和田菜穂子准教授と学生が避難所での組立て、設置を協力。

4.7 スマイルエンジン山形
山形大学と共同で運営する週末ボランティアバス。5月の運行開始以来、山形市⇄石巻市を約40往復、のべ1,400名以上の学生・市民がヘッド除けや瓦礫撤去などの支援活動に参加している。「福興会議」が企画。

5.4 やまがた芸術学舎誕生
創立20周年記念事業として設立。地域の方々が芸術に親しみ、交流できるコミュニティ空間として、また大学の知財を東北の産業や教育振興につなげる創造の結節点として展開中。スマイルエンジンの発着点。

5.12 5.21 5.26
FUKUKOU LIVE
「福興会議」の活動支援を目的にはじまった講義形式のチャリティーライブ。映像ディレクターの岩井天志准教授を中心に、首都圏在住の支援者で運営されている。これまでに七尾旅人、DE DE MOUSEらが参加。

6.18 6.22 6.24
文化財保存修復
文化財保存修復研究センターでは、文化財救済のため被災地から寄せられた東洋絵画、立体美術作品、歴史的な研究資料や書籍類などの応急処置を進めている。これまでに引き受けた作品数は5,000点ほど。

6.24 福島原発事故に伴う授業料等の減免
福島第一原子力発電所事故に伴う避難措置により、自宅が避難区域などにあり、学費支弁者が避難生活を送られている場合、平成23年度の入学金及び授業料の全額免除を決定。

8.9 キッズアートキャンプ山形
TRSOが企画・実施したサマーキャンプ。福島原発事故で避難中の南相馬市の家族を、3泊4日で芸工大キャンパスに招待した。人材・施設を活かしたワークショップを複数開催し、今後も継続予定。

9.3 9.13
福しまビクニック
山形県内に自主避難中の福島の家族に呼びかけ、村山市の田園地帯で実施している交流ビクニック。2011年は秋に3回実施。共に70名以上が参加し、山形と福島の母子が交流を深め、必要な情報交換をしている。

9.3 9.13
シンポジウム「はじめのことば みつけだそう」
文芸学科がこれからの新しい世界を展望するために、「ことば」を原点として世界の再構築を試みるためのシンポジウムを4回シリーズで開催。ゲスト講師と共に、これからの言葉の持つ意味を語った。

10.21 10.19
福しま図案室
「福しまビクニック」の冬期バージョン。雪で閉ざされる冬の山形で、生活空間を親子で楽しく飾るためのグラフィック・ワークショップを開催。(山形まなび館 MONO SCHOOL)で継続的に実施している。

11.20 11.21
子ども芸術の家
被災した子どものサポート活動を「子ども芸術の家プロジェクト」と名づけ、姉妹校・京都造形芸術大学との共同事業として、長期にわたり継続していくことを決定。TRSOが中心となり事業運営する。

1.13 1.13
東北未来絵本
大震災を忘れず語りつぐために、寄せられた言葉を1冊の絵本にし、東北の子どもたちに渡していくプロジェクト。山形新聞社が提唱。企画コーディネーター・アートディレクションをTRSO宮本武典准教授が担当。

2.1 2.5
六本木アートナイト2012
六本木で「深夜教室」、「BIVOUAC FOR TOHOKU -復興の野営」を実施。敷地内に特設ドームを設置し、2日間で100台の木製ベンチを組み立て、女川町の仮設商店街へ寄付した。詳しくは本誌8ページに掲載。

3.11 3.11
3.24
3.11 追悼の輪
2012年3月11日、東日本大震災で亡くなった方々の追悼とこれからの決意を込めて、1人ずつ震災当日の体験と今を語り分かち合った。想いを語り継いだ言葉は本誌2、3ページに掲載。

3.24 3.24

個々の人生に思いを馳せ、人と人を結びつける芸術を築くこと。

東北と日本と地球のために、次の一步を踏み出す芸工大。
学長の根岸吉太郎と「福興会議」代表の田中秀樹より、2012年3月11日、そして未来に向けて。



東日本大震災から1年が経ちました。地震や津波によって亡くなられた多くの方々、また未だに見つからない多くの方々、震災後の生活の困難さから命を失った皆様のご冥福を祈ります。亡くなられた方々一人ひとりに家族があり、友人があり、仲間があり、人生がありました。悲劇を犠牲者の数字によって捉えるのではなく、個々の人生に思いを馳せることが芸術を志す我々の役割でしょう。親しかった人でも見知らぬ人でも亡くなった方々のひとつの命の輝きを受け止めようとするのが、鎮魂となるのではないのでしょうか。

振り返ってみれば、東北の地にあり東北の二文字を名に冠し、東北ルネサンスを理念とする大学として本学ができることは何かと考えさせられる1年であったと言えるでしょう。芸術、デザイン、文化を学び作品を創造し、また研究を発表することは、震災とそれに続く原発事故といった大きな社会変動の中でどのような意味をもつか、自己の生に問いかけ続けた1年ではなかったでしょうか。ボランティアをしている意味を問い、絵筆をとれない自己の感情を見つめ、辛い苦しい気持ちを越えて学生諸君は自分の足で揺れる大地に立ち上がろうとしたのです。卒業制作の作品群を觀ても一人ひとりが震災後の日本の現実と自己の現在を直接的にぶつけ合った結果という印象を持ちました。

この1年の間、本学でも卒業式や入学式の延期をはじめとして授業開始が5月の連休明けまでずれ込むなど、大幅な日程変更などの影響がありました。ただ震災発生当時春休みで東北各地の実家に帰省していた学生が多いにも関わらず、在学生にひとりも犠牲者が出なかったことは不幸中の幸いでした。全員の安否が確認できるまで奮闘した職員の皆さんの労力は

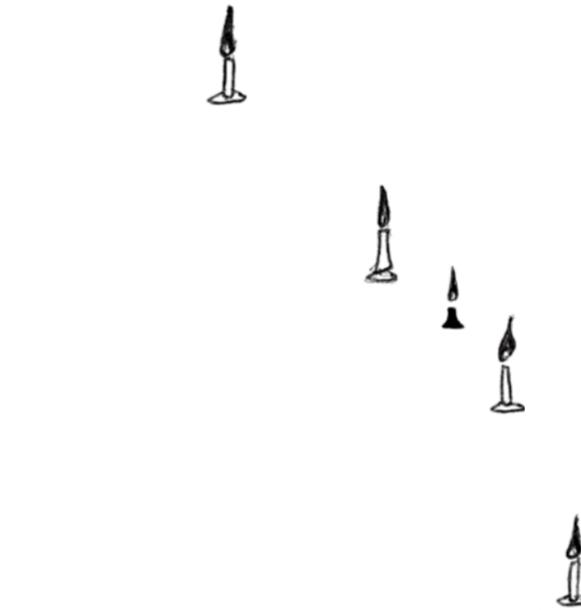
変なものでした。また情報がなく停電が続くなか、大学に集まった学生、卒業生、教職員によって震災という事態を把握し、自分たちができることを探し出したグループがあり、ボランティア活動の中心となった福興会議や東北支援機構の活動へと発展し、いまま継続していることも評価すべきことでしょう。

震災発生後、東北沿岸の被災地の惨状の前に言葉を失い立ち尽くすことしかできず、芸術は自然の力の前に無力ではないかと我々は自らに問いかけました。しかしその時点から一歩ずつ地道に自らが考え、作品や社会へ芸術ができることの答えを投げかけてきたのではないのでしょうか。もちろん微力であり稚拙であるかもしれませんが、言葉を失ったところから本当の言葉を探す作業が始まったのだと思います。

震災前に戻ることは誰もできません。多くの死が自然によってもたらされましたが、東北はその大自然との共生原理に基づく文化や生活を縄文の時代から築いてきたのです。復興への道はあまりに厳しく険しいけれど、自然をねじ曲げようとする原子力を信ずる科学ではなく自然と共生していく工学を探し、自然に耳を澄まし肌で感じた風や太陽のエネルギーをもとに、本当に人と人を結びつけるための芸術を築いていくことが、東北をバックボーンにする私たちに課せられた使命だと思います。

学生諸君、未来に向かってもう一度自分たちの立っている場所を確認し、まず次の一步をしっかりと歩み出さずしてありませんか。東北と日本と地球のために。

2012年3月12日
東北芸術工科大学 学長 根岸吉太郎



東日本大震災から1年が経とうとしています。あの瞬間から今日までの日々は驚くほど早く、密度の濃い日々でした。

震災直後、大学生である私たちは現地に行くこともできず、確固たる専門性も持ち合わせず、一体なにができるのか日々悩んできました。しかし、震災直後に声をかけ集まった在校生、卒業生、教職員。それぞれがもつ背景は全く異なり、震災直後の不安を抱えながらも、あのとき集まれた仲間がいたからこそ、その仲間たちのおかげでこれまで迷いながらも前進してこれたのだと思っています。

震災の影響で失ったものは数えきれません。しかし、震災直後から被災地、被災者に関わりながら、それぞれの向き合い方は違っている、その経験を通して気付かされたことも得たことも沢山あったと感じています。「震災から1年」の今日、「あの日」を思い出すのではなく、2011年3月11日14時46分の「あの瞬間」から今日までを改めて振り返ってみたいと思います。私は「あの日、あのとき」の点ではなく、途切れない線をイメージしたいと思っています。これまでの自分の生活でも、被災地のこれからでも「つながり」をイメージしていきたいです。

私たちが見てきた、震災で失われたものは震災当初にだけ存在していたのではなく、震災によって見えてきた大切な何かも震災後に生まれたものばかりではありませんでした。私たちの生活の中には弱く儂くても、脈々と受け継がれてきた幸せのカタチや風景があったのでした。

「震災から1年」

きっとこの日で何かに区切りがつくわけはありません。あの時と今日までを振り返り、これからを考える。今日でなにかがつながったり、新しく始まったりするのだと思っています。あの揺れを経験した私たちは、これからも共に生き続けていくでしょう。新しい春を前に、またそれぞれの生活や立場は変わっていきませんが、これからも被災地の福興へ共に生きていきたいと思っています。

2012年3月12日
「福興会議」学生代表 東北芸術工科大学大学院生 田中秀樹



芸工大 * 折り鶴プロジェクト

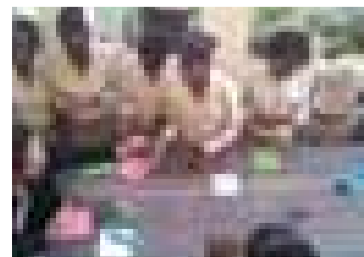
世界中から寄せられた、東北復興への願い。
想いと想いをつなぐ、折り鶴プロジェクト。

総合美術コースの学生と仙台の子どもたちが、10万羽の折り鶴でオブジェを制作しました。

東日本大震災以降、「折り鶴に東北復興の願いを込め被災地に贈ろう」という動きがインターネットを通じて世界中に広がりました。非営利団体ベツスファミリーファンデーションはそれを「世界の子どもたちが折った折り鶴を集め一羽あたり2ドルを寄付する」方法を体系化。200万羽の折り鶴と40万ドルの寄付金が被災した各地へと寄せられました。総合美術コースでは、(NPO法人東北の造形作家を支援する会)と協働し、その中の2万ドルの寄付金と10万羽の折り鶴を引継ぎ、東北の子どもたちと世界の子どもたちとを繋ぐ「折り鶴プロジェクト」を始動しました。1月13日から15日にかけてエスパル仙台にて、心を込めて折られた折り鶴を使用したオブジェ制作のワークショップを開催。来場した仙台市内の子どもたちと一緒に、12cmの透明の立方体に折り鶴を詰め、テープやカッティングシートなどで装飾したキューブ約2,000個を積み上げ大きなオブジェを作成しました。また、折り鶴を使った吹き流しや、大きさ3.6m×4.5mのハート形世界地図に折り鶴を貼っていく大きなタペストリーも制作。学生たちはこれらの構想を練り試作を重ね、当日は世界から届けられた想いの一つひとつを子どもたちと一緒に開梱していきました。学生たちは、「子どもたちがとにかく元気」「カッティングシートやテープの使い

方が、大人と違って独創的」「どの子も一生懸命に取り組んでくれたことがとても嬉しかった」と、プロジェクトで子どもたちと触れ合うことが新鮮な刺激になったことを口々に語りました。より多くの人々にメッセージが伝わるように、オブジェの一部は仙台市の榴岡小学校、幸町児童館等に設置。榴岡小学校の子どもたちが、折り鶴のオブジェを背に各国の言葉で書かれた“ありがとう”のメッセージを伝える映像は、NHKインターナショナルを通じて全世界へと発信されました。子どもたちは「オブジェを見ていると明るい気持ちになります。津波の被害に遭った人にも見てもらいたいです」と、元気いっぱいに話しました。花澤准教授は今回の「折り鶴プロジェクト」に関わるにあたり、「最初にサンプルとして送ってもらった折り鶴の入った箱を開けた時、心のこもったメッセージに言葉にならない感動を覚えました。しかし、それでオブジェを作っただけでは被災地の子どもにとっては実感が乏しいものになるのではと思い、共に作り楽しい時間を過ごすこと、一人ひとりの手のひらに重さを感じられるものにするのを大事にしました」と語り、多くの人の想いと想いをつなぐプロジェクトとなったことに手応えを感じています。

WEB プロジェクトと子どもたちの関わりを紹介しています。



写真左:被災地の復興を願い、手慣れない折り鶴を一生懸命に折る世界中の子どもたち。写真右:寄せられた折り鶴は、当初の予定である100万羽を大きく上回り200万羽にもなった。様々な色や大きさの折り鶴には、メッセージが添えられたものも。このプロジェクトには総合美術コースの有志の学生に加え、プロダクトデザイン学科の学生2名も参加した。



美術科総合美術コース

幅広い創作活動が好きで、全ての人の間に開かれたコースです。「芸術とは何か」「芸術に何ができるのか」という原点から、新しい芸術表現の可能性への挑戦と、社会の文化的向上につながる芸術を通じた活動を企画し、実践していく能力を身につけていきます。

OB * 教授

人との出会いで実現する、ものづくり山形から世界へ。

おもしろいと思ったら、大学外でも活動。いろいろな経験を重ねた学生時代。



川瀬和幸 Kazuyuki Kawase(写真右) / 大学院プロダクトデザイン領域修了後、奥山清行氏が率いる(KEN OKUYAMA DESIGN)に勤務。デザイナー・プロジェクトマネージャー。卒業制作「感覚インターフェース」は「MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD」で水野誠一賞を受賞。

柚木泰彦 Yasuhiko Yunoki(写真左) / プロダクトデザイン学科准教授、学科長。専門分野は人とモノの接点となるヒューマンインタフェース、ユニバーサルデザイン。主に福祉領域・ヒューマンインタフェース領域におけるデザイン研究と機器開発に携わる。現在、NPO山形県デザインネットワーク理事として活動中。



写真上:真っ白な空間に製作中の作品や図面が並ぶ、山形のスタジオで、ワイングラスの製法について話し合う柚木准教授と川瀬さん。後ろに見えるのは「k.o7」。写真下:新潟県燕市の企業と開発を進めるカトラリー(洋食器)のデザイン検討用のモデルを削る川瀬さん。

山形出身で世界的なデザイナーとして知られる奥山清行氏が率いるデザイン事務所、株式会社KEN OKUYAMA DESIGN。卒業生の川瀬和幸さんはそこで、デザイナー・プロジェクトマネージャーとして活躍しています。川瀬さんは、家具、小物、店舗デザインなどを担当し、代表作に多田木工が製作した照明器具「リアーナ」のデザインがあります。「リアーナ」は、職人が曲げた木の下にLEDライトが設置され、天井に螺旋状の木の影が映るといふもの。見る度に表情が変わり、空間を演出する照明器具です。職人の技が生きたこの作品について、川瀬さんは「日本の職人だからこそできるものづくり、地場が持つ特性を見せるということにこだわっています」と語ります。現在は、地場産業の盛り上げに貢献してきた実績を買われ、新潟県燕市と協力した自社ブランドの商品づくりに尽力。最近では海外からの依頼も増えているそうです。

柚木准教授との出会いは、学部3年生の地域産業デザインの授業。大学院生になってからは授業のアシスタントをするなど交流を深めました。柚木准教授は、川瀬さんの卒業制作であるオーディオ操作の提案「感覚インターフェース」について、「既存のインターフェースとは違う着眼点で、音と空間との関係性をデザインしているのが斬新でした。単に概念を提示するだけでなく、いろいろな人の協力を得ながら実際に動くモデルを作り上げた行動力が素晴らしい」と、高く評価しました。川瀬さんの現在の仕事ぶりを見て、柚木准教授は「仕事を始めてから経過した4年という時間以上に逞しく頼もしい存在になってますね。縦、横の人のつながりもしっかり形成されていると思います。川瀬君が核となってネットワークを広げ、自分も頑張っているというアピールがあれば、自然と周囲も元気になるのではないですか。これからも大いに期待しています」と、激励しました。川瀬さんは、多田木工との産学連携の橋渡し役としても関与。このプロジェクトでは廃材を利用した「オサカナツリ」が商品化されました。

川瀬さんがこれほど多くのプロジェクトに関わりを持っているのは、学生時代にコースに固定されず様々な挑戦をしたことが影響しているのでは、と自身で振り返ります。「おもしろいと思ったら大学外のイベントにも出て行きましたし、海外での展示も行いました。これからプロダクトを志す学生には、自分が何をしたいのかを考え、いろんな人と出会い、考え方に触れてほしいなと思います」と、後輩の活躍にエールを贈りました。今後は、環境のよい山形でライフスタイルを提案する商品を創作しながら、チャンスがあれば大学でワークショップなども開きたいと展望を語りました。



プロダクトデザイン学科

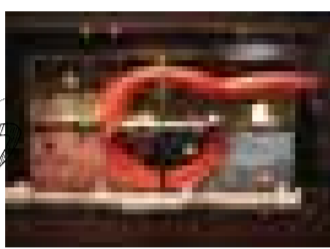
家具、家電、自動車などの製品、インテリア雑貨、公共空間やディスプレイまで、私たちの生活を支える。製品や空間を創造するデザイナーを養成します。素材や形態、機能など、枠組みにとらわれない思考力を身につけ、企業との連携授業などで実践的な力を習得します。

NEWS & TOPICS



2 2012年度以降の学長、副学長、大学院長を選任しました

2月22日の理事会で2012年度以降の役職者を審議し以下の通り決定いたしました。任期はいずれも2012年4月1日から2014年3月31日の2年間です。
◎学長：根岸吉太郎(映像学科教授) ◎副学長：片上義則(プロダクトデザイン学科教授) ◎副学長：宮島達男(教授) ◎大学院長：白杉悦雄(教養教育センター長/教授)



総合美術コースが十字屋で展覧会 コラボ商品やワークショップも

美術科総合美術コースでは、十字屋山形店で2回目となる展覧会を2月3日～14日に開催。1～3年生の選抜作品約20点と、地域企業と連携したプロジェクトや商品の展示のほか、飛び出すメッセージカードを作るワークショップも開催しました。また1階でパレンタイン・デーにちなんだディスプレイも展示しました。



松井大輔セレクトの復興支援 Tシャツとエコバック発売

東北復興支援機構TRSOでは、2011年10月に、京都造形芸術大学と東北復興支援「松井大輔デザインコンペ」を実施。両大学の学生30件の応募の中から松井氏が選考したデザインのTシャツとエコバックを、通信販売サイト「OPPNNA STYLE(オープンナスタイル)」で1月5日より発売しました。収益は東北運動会復活プロジェクト基金を通じて、東日本大震災の支援金として活用されます。なお、3月までの収益金は5月に寄付予定です。◎Tシャツ(2,300円)：門馬太郎(4年)/遠藤智哉(4年) ◎エコバック(1,300円)：阿部千里(3年)/ジェップ・タウン・アン(4年)/門馬太郎(4年)/遠藤智哉(4年、以上グラフィックデザイン学科)
URL: https://oppnnastyle.com/



佐々木周平さんのアートユニット(three)が 「shiseido art egg展」で個展

株式会社資生堂が主催する公募展「第6回 shiseido art egg」に、工芸コース卒業生の佐々木周平さんが所属するアートユニット(three)の作品が入選し、1月6日～29日に資生堂ギャラリー(東京都)で開催。この展覧会は、新進アーティストに発表の場を提供することを目的とした公募展で、全国で314件の応募の中から3組が選出されました。◎主催：株式会社資生堂
URL: http://www.shiseido.co.jp/gallery/

16 六本木で一夜限りのアートの饗宴「深夜教室+BIVOUAC FOR TOHOKU」

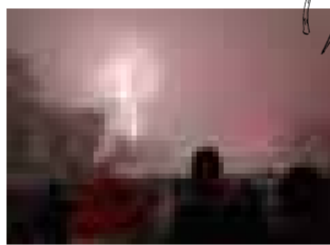
六本木の街を舞台とした「六本木アートナイト2012」のプログラム「Roppongi Agora」として、「深夜教室」を3月24日にテレビ朝日UMUで開催。全国の学生から「アートに何が可能か？」をテーマに募集した、3.11以後のアートの展開や未来の可能性を追求する提案の中から7案を選出。本学からは3名が「深夜教室」でのプレゼンテーションに参加し、本学の宮島達男副学長、中山ダイスケ教授と、京都造形芸術大学のヤノベケンジ教授、名和晃平准教授と共にディスカッションしました。また東北復興支援機構「TRSO」では「BIVOUAC FOR TOHOKU-復興の野営」を3月24日～25日に開催。「六本木の森で復興野営」をコンセプトに学生たちが、六本木ヒルズアリーナに仮設作業所を設置。女川町の仮設商店街へ送る木製ベンチ100台を東京の方と共に組み立て、東北と他地域の温度差を縮めるプロジェクトとなりました。

◎「深夜教室」本学からの選出学生：米谷亮/佐藤成美/金子正人、講師：宮島達男(副学長)/中山ダイスケ(グラフィックデザイン学科教授)/ヤノベケンジ(京都造形芸術大学教授)/名和晃平(京都造形芸術大学准教授) ◎「BIVOUAC FOR TOHOKU-復興の野営」スタッフ：田中秀樹/金子正人/鳥越渚/千田若菜/佐藤彩絵/高橋悠真/清水紗和子/岸香純/鳥羽由子/茅原ゆきの/早坂歩/青山美咲/鍛崎純也/大津悠美子/田久保静香/他卒業生有志(以上東北芸術工科大学)、熊谷周三/中川遼太/山崎安佳里(以上山形大学)、coffee aid:佐藤喬一(nouka)/松山準/工藤裕太/茂和泉かなこ(R・コモンズ)、協力：石巻工房/石巻2.0/手づゆパンnouka/森美術館/森ビル株式会社、企画：宮本武典(東北復興支援機構TRSOディレクター) URL: http://www.roppongiartnight.com/



18 子どもたちが「サンクの学校」を卒業 企画構想学科がイベント開催

企画構想学科4年生43名が2011年12月10日に仙台国際センターでチャリティイベント「子どもサンクともみの木」を開催。学生が子供たちにサンクローズの“笑い方クリスマスプレゼントの仕方”などを伝授するワークショップを行い、子どもたちは夢と希望を与える“200人のこどもサンク”として「サンクの学校 卒業証書」を授与されました。また、「2011 SENDAI 光のページェント」のツリーへオリジナルオーナメントの飾り付けも行いました。



蔵王の夜に輝くデザイン花火 「蔵王名物花火」を打ち上げ

山形県独自の花火文化を創出するため、山形県で唯一の花火師安藤孝二氏(安藤煙火店)と企画構想学科の学生7名と田中範男教授が共同で特製打ち上げ花火を企画。学生がデザインした「玉こんにゃく」「温泉マーク」「樹水」など蔵王名物を模ったオリジナルの「蔵王名物花火」を2月4日に開催された蔵王樹氷まつり「雪と炎の饗宴」の中で披露しました。◎会場：蔵王温泉スキー場上の台ゲレンデ ◎参加学生：石川翔梧/後藤奈央/酒井沙織/鈴木美香/高橋ひろみ/成田星/星みき(以上企画構想学科3年)



エマニュエル・ムホー准教授が アジアの建築・デザイン賞で受賞

香港デザインセンターが主催するアジアデザイン賞「Design for Asia Award 2011」で、エマニュエル・ムホー准教授がデザインした「果鴨信用金庫志村支店(写真)」が「eda」がSilver Awardを受賞。また香港のデザイン雑誌「Perspective」が主催する建築デザインワード「Perspective Awards 2011」でも「果鴨信用金庫志村支店」がCertificate of Excellenceを受賞しました。

NEWS & TOPICS

16 16 選抜作品約60点を展示 卒業・修了展「東京展」

芸術学部美術科(日本画、洋画、版画、彫刻、工芸、テキスタイル)と大学院芸術文化専攻の卒業・修了制作の中から選抜作品約60点を展示する東北芸術工科大学 卒業・修了展「東京展」を外苑キャンパスで3月3日～8日に開催しました。日本各地から山形の地に集い、東北の美しく豊かな自然に育まれながら、真摯に創作活動に励んできたそれぞれの学生たちの独自の世界観がより引きだされる展示の機会となりました。
URL: http://www.tuad.ac.jp/sotsuten/

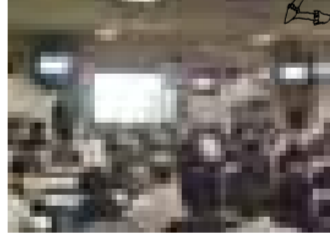


18 現代美術の若手登門 「VOCA展2012」 卒業生の高橋美美子さんが出品

3月15日～30日に上野の森美術館で開催された「VOCA展2012-現代美術の展覧 新しい平面の作家たち」に、日本画コース卒業生の高橋美美子さんが出品。本展は、全国的美術館学芸員、ジャーナリストなどが40才以下の若手作家を推薦し平面作品の新作を出品する現代美術界の登門です。◎主催：上野の森美術館

22 22 全国大学版画展で卒業生が 「美術館収蔵賞」受賞

「第36回全国大学版画展」で、版画コース卒業生の倉倉奈々子さんと日沼亜衣さんが「美術館収蔵賞」を受賞。同館で2011年12月3日～18日に受賞展が開催されました。これは版画を志す大学生が一年の成果を発表する展示会で、今回は全国244名の中から、30点の作品に同賞が贈られました。◎主催：大学版画学会/町田市立国際版画美術館
URL: http://cuapsj.org/exhibition.html



放射能汚染の影響と今後を探る 公開講座「放射能汚染と東北の自然」

2011年11月に福島県の一部地域で捕獲されたインシメントに対して摂取・出荷制限が出されたことを受け、公開講座「放射能汚染と東北の自然」を12月21日に開催しました。福島第一原子力発電所の事故での放射性セシウムと野生動物との関係、阿武隈や福島県境の山地などに生息する野生動物の状態、野生鳥獣を食資源とする狩猟者への影響など、今後の方向性を探りました。◎主催：東北文化研究センター

24 24 臨場感あるエネルギーの放出 近藤亜樹さんが 「G-tokyo」に出品

森アーツセンターギャラリー(東京都)で2月25日、26日に開催されたアートフェア「G-tokyo」に、大学院実験芸術領域2年生の近藤亜樹さんの作品「走る猫」「音を書く人」など4点が出品されました。これは国際的なアート市場を視野に、作家の選出と新作発表をするものです。◎主催：G-tokyo2012実行委員会 ◎メディアスポンサー：ART iT
URL: www.gtokyo-art.com

17 17 平成23年度 東北芸術工科大学 学長奨励賞授賞式を行いました

東北芸術工科大学 学長奨励賞は、全国大会等で優秀な成績を取ったり社会的に貢献し、顕著な社会活動を行ったなどの秀でた学生または団体を表彰する制度です。平成23年度の受賞者を決定し、授賞式を2月29日に行いました。
◎学長奨励賞 個人の部(5名)：飯塚花実(映像学科3年)/西村沙由里(大学院版画領域1年)/原田圭(大学院洋画領域2年)/高坂静香(大学院彫刻領域2年)/久保木桂子(大学院日本画領域2年)
団体の部(1団体)：福興会議(代表 田中秀樹)



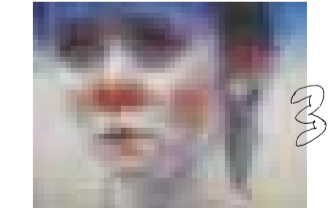
仙台発! リノベーションスタイル 「二人暮らしの家」オープンハウス

中古マンションを安価で購入し、都心での生活をリーズナブルに実現するリノベーション計画を、建築・環境デザイン学科と株式会社デザインホーム(仙台市)との産学連携で企画。学生提案の5つのアイデアから1つが選定され、「二人暮らしの家」として完成し、2月10日～12日にオープンハウスとシンポジウムを開催しました。この物件は実際に販売され、新たなリノベーションの流れを仙台で生むことが期待されています。



近藤一弥・ゼミ ×水戸芸術館 展覧会図録を デザインしました

大学と美術館との新しい関係を作る目的で、近藤一弥グラフィックデザイン学科教授と学生5名が、震災後最初の水戸芸術館(茨城県水戸市)の展覧会「CAFE in Mito 2011-かかわりの色いろ」の図録をデザイン。実際の展覧会を何度も見学した上で完成させました。◎図録デザイン：石沢菜央子/大河原達/高久美弥/古家麻海/渡辺結花(以上グラフィックデザイン学科4年) ◎デザイン協力：Kazuya Kondo Inc
URL: http://arttowermito.or.jp/



東北の地と、そこから生まれた力 「トウホクノチカラ」展

彫刻家の深井一郎美術科講師がコーディネーターとなったグループ展「トウホクノチカラ」展を2月29日～3月11日に西武渋谷店で開催。本学の卒業生やゆかりのある作家が出品しました。「トウホクノチカラ」には、「東北の地から」と「東北の力」の2つの意味を込め、深井講師の声かけに西武渋谷店が賛同し展覧会が実現。作家14名の平面、立体、器などの作品が約100点展示され、作品販売も行われました。◎主催：西武渋谷店

